

階上町における伝統芸能と小学校体育科 表現運動の指導に関する考察

嶋崎 綾乃 根城 隆幸

要旨 階上町の小学校は「特色ある学校づくり」の一環として、地域に伝わる伝統芸能を教育課程に位置付け、すべての小学校がひとつずつ受け継いでいる。本研究は、階上町のすべての小学校を対象に、伝統芸能に対する児童の意識と、体育におけるダンスとのかかわりを調査し、伝統芸能と表現運動の連携を意識した指導を考察することとした。児童は伝統芸能の活動を好み、活動をする上での練習や発表などに積極的に臨もうとする意識が見られた。特に、活動を好む児童ほど発表することに喜びを感じ、練習や発表に進んで取り組んでいることが示唆された。体育の授業におけるダンスに対しても81%の児童が「好き」であり、伝統芸能で学んだことがダンスに生かされているという児童は70%であった。伝統芸能とダンスとのかかわりを意識していない児童は30%であった。現在、6校中5校が総合的な学習の時間で伝統芸能を指導しているが、体育で行うダンスとの関連を意識することで、横断的・探究的な学習となり、双方においてより深い学びになると考えられる。そのために伝統芸能で培った体の動かし方やリズムのとり方をダンスの授業に応用させるような言葉かけや、学習内容のより一層の工夫が必要である。

1. はじめに

1) 研究背景

平成26年12月に閣議決定された「まち・ひと・しごと創生総合戦略」により、地方創生に関する様々な取り組みが行われ、注目が集まっている。地方では少子高齢化等の人口減少に伴い、コミュニティの衰退が危惧され、学校と地域との連携を通じたコミュニティの再形成および活性化が求められている。

青森県東南部に位置する階上町は、平成29年度4月現在で人口約1.38万人であり、小学校数は6校である。地方における少子化は著しく、階上町においても全児童数が20名に満たない小学校もあり、学校の統廃合が検討されているところである。階上町の小学校は「特色ある学校づくり」の一環として、地域に伝わる伝統芸能を教育課程に位置付け、すべての小学校が伝統芸能をひとつずつ受け継いでいる。保存会に所属する地域住民から手解きを受ける学校も多く、学校と地域との連携がうかがえる¹⁾。しかしながら伝承活動にも少子化の影響は大きく、平成8年度には8校あった小学校が現在は6校となり、統廃合となった小学校の伝統芸能を伝承する児童がいないのが現状である。

階上町の小学校における伝統芸能の取り組みは、総合的な学習の時間への位置付けが6校中5校、部活動が1校であり、学習指導要領における体育の「F. 表現運動」（以下、「表現運動」とする）との関連はほぼすべての学校が意識をしていないことが分かっている¹⁾。しかし、体

育の表現運動における第5学年及び第6学年の目標及び内容では、「イ. フォークダンス（日本の民踊を含む）」の内容として「伝承されてきた日本の地域の踊りや外国の踊りから、踊り方の特徴をとらえ、基本的なステップや動きを身に付けて、音楽に合わせてみんなで楽しく踊って交流することができるようにする」²⁾と示されている。このことから、伝統芸能の取り組みと体育の表現運動（以下、「ダンス」とする）との関連に考察の余地があるのではないかと推察した。筆者による報告書では¹⁾、教員は伝統芸能と体育の関連は意識していないと述べているものの、児童の意識をうかがい知ることができなかった。そこで、本研究では、伝統芸能に対する児童の意識に着目し、特に、体育および表現運動との関連に対する児童の意識を考察することとした。

2) 各小学校の伝統芸能の取り組み

階上町立小学校は現在6校あり、すべての小学校が伝統芸能をひとつずつ受け継いでおり、教育課程に位置付けて取り組んでいる。

①階上町立赤保内小学校

「赤保内子ども駒踊り」を伝統芸能としている。腰の前後に馬のつくりものをつけ、笛・太鼓・手平鐘の囃子に合わせて、円陣をつくったり、隊列になったりして、前後左右に跳ね回る動作を繰り返すものである。全校生徒による縦割り活動であり、主に6年生が下級生への指導を担っている。



図1

②階上町立石鉢小学校

「石鉢臥牛太鼓」を伝統芸能としている。臥牛山のように、大きくたくましい心を持つ人間に育って欲しいとの地区の人たちの願いが込められ、和太鼓を叩きながら体を動かし、主に作曲を演奏している。石鉢小学校のみ部活動に位置付け、4年生から6年生の希望者によって活動している。



図2

③階上町立大蛇小学校

「大蛇海鳴りソーラン」を伝統芸能としている。各地に広まっている既存の「よさこいソーラン」ではなく、地域と学校がひとつになる行事に発展させたいという思いから、「階上町立大蛇小学校父母と教師の会」が製作した「大蛇海鳴りソーラン」を楽曲として使用し、地域住民によって作り上げられた創作芸能である。全校生徒が活動している。



図3

④階上町立^{こみなと}小舟渡小学校

「沖揚げ音頭」を伝統芸能としている。漁師町の姿を伝え、子どもを通して残していきたいとの思いから、イワシ漁の作業唄をベースに大漁旗や漁網を手に紅白の鉢巻き、はんでん、白たすき、あんばい棒を持ち、歌い踊るものである。全校生徒が活動している。



図4

⑤階上町立道仏小学校

「道仏神楽」を伝統芸能としている。神楽組保存会による指導を受け継承している。神楽の舞は、権現舞と御祈禱舞の中の盆舞などが継承されており、冠り物や衣装を付け、勇壮な中にも優雅、神聖の中にも洒落が感じられ、古くから民衆の心をとらえてきた。3～6年生が活動している。



図5

⑥階上町立階上小学校

「子どもえんぶり」を伝統芸能としている。田植え行事として百姓たちが豊年の願いを込めて伝承してきたものである。八戸市を中心とする青森県南の伝統芸能であるえんぶりを、地域のえんぶり組保存会による指導を受け継承している。土をかき摺り、田の代かきを演じ、鳴子板を振り拍子を取りながら、身振りまわるものである。全校生徒が活動している。



図6

2. 研究の目的

本研究は、青森県三戸郡階上町のすべての小学校を対象に、伝統芸能に対する児童の意識と、「表現運動」とのかかわりを調査することで、地域が保有する伝統芸能を、学校教育を介して継承していくことの意義を明らかにする。また、伝統芸能への取り組みは、児童の自己表現活動のひとつとしてもその価値を発揮するものであると推察できるため、表現運動の一環として捉えることにより、伝統芸能と表現運動の連携を意識した指導を考察することを目的とする。

3. 方 法

伝統芸能に対する児童の意識を調査するために、小学校6年生97名（男子35名、女子62名）を対象にした無記名自記式の質問紙調査を実施した。本研究の内容や倫理的配慮について担任教諭の同意を得ることにより、質問紙の配布は学級担任に一任した。分からない言葉があれば学級担任に確認して質問の意味を理解した上で回答してもらうことをフェイスシートにより依頼した。また、質問紙にはすべてふりがなを振り、小学校6年生が理解できる内容であることを共同研究者とともに検討した。質問項目は、文部科学省による学習指導要領における目標および内容を参考

にした。質問項目は表1の通りである。質問項目に対して、「はい」または「いいえ」の2件法による回答と、自由記述による回答を求めた。分析方法は、単純集計ののち、伝統芸能の活動が「好き」群と「嫌い」群の関連を調べるために、独立性の検定を行い、 χ^2 値に有意差が見られるか否か検証した。また、自由記述に対して伝統芸能とダンスとの関連を分類した。

なお、本研究の実施にあたっては、八戸学院大学倫理委員会の承認（No.17-06）を得た。

表1. 質問紙調査の内容

Q. 1	伝統芸能の活動に参加することは好きですか。
Q. 2	伝統芸能を見てもらうことが嬉しいですか。
Q. 3	伝統芸能の動きの特徴をつかんでうまく表現することができますか。
Q. 4	励ましあって練習や発表に進んで取り組むことができますか。
Q. 5	練習や発表の仕方を工夫することができますか。
Q. 6	体育の中でダンスの時間は好きですか。
Q. 7	体育の授業でダンスを踊ることに抵抗はありますか。
Q. 8	伝統芸能で学んだことが体育のダンスの時間に生かされていると思いますか（「はい」の人はその理由、「いいえ」の人はその理由）。
Q. 9	伝統芸能の発表の時にどのようなことに注意（意識）していますか。
Q. 10	伝統芸能の活動に対してどのような気持ちを持っていますか。

4. 結果と考察

1) 伝統芸能の活動に対する児童の意識

単純集計の結果、伝統芸能の活動に対する児童の意識と、ダンス（注1）への関連が明らかとなった（図7）。80%以上の児童が伝統芸能の活動に参加することが好きであり、発表することに対する喜びがあり、練習や発表の仕方を工夫している様子が見ええた。同じく80%以上の児童が体育におけるダンスが好きであり、授業内でダンスをすることに抵抗がないことが分かった。また、70%の児童が伝統芸能で学んだことが体育のダンスの時間に生かされているという意識があったことから、伝統芸能で「表現する」と、ダンスの授業で「表現する」との間に相当のかかわりが見られた。

さらに、独立性の検定の結果、伝統芸能の活動が「好き」群と「嫌い」群において、他の質問項目との関連が明らかとなった（表2）。伝統芸能が「好き」群は、「嫌い」群に比べ、伝統芸能の活動に積極的に取り組み、体育のダンスも好きであると仮説を立てたが、伝統芸能の「好き」、「嫌い」と、体育のダンスの「好き」、「嫌い」には関連が見られなかった。しかし、「Q. 2 伝統芸能の活動を見てもらうことが嬉しいですか」および「Q. 4 励ましあって練習や発表に進んで取り組むことができますか」において、伝統芸能の「好き」、「嫌い」との間に関連があることが明らかとなった。

筆者の報告書¹⁾による各学校の校長へのインタビューでは、すべての学校において「子どもたちは誇りを持って取り組んでいる」という好意的な言説が得られている。今回の調査から、児童の多くも伝統芸能の活動を好み、積極的に練習に取り組んでいることが分かった。しかし、「Q. 3 動きの特徴をつかんでうまく表現することができますか」という質問に対しては、他の

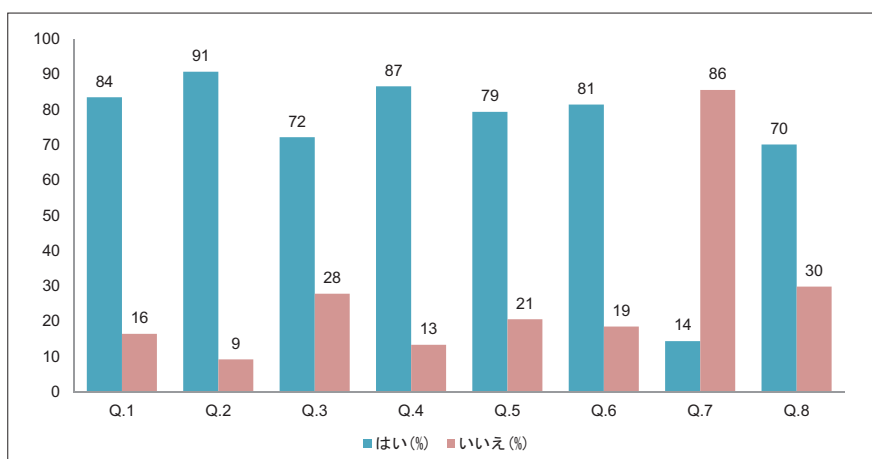


図7. 伝統芸能の活動に対する児童の意識

表2. 伝統芸能の活動の好悪と他の質問項目との関連

	伝統芸能の嗜好	はい	いいえ	合計	χ^2	p	分析結果
Q. 2	好き	60	21	81	10. 989	0. 001 *	伝統芸能の嗜好と、発表を見てもらうことの嬉しさの間には関連がある。
	嫌い	10	6	16			
Q. 3	好き	73	8	81	0. 891	0. 345	
	嫌い	11	5	16			
Q. 4	好き	65	16	81	5. 259	0. 022 *	伝統芸能の嗜好と、進んで取り組むことができる積極性の間には関連がある。
	嫌い	12	4	16			
Q. 5	好き	65	16	81	0. 225	0. 635	
	嫌い	12	4	16			
Q. 6	好き	68	13	81	2. 043	0. 153	
	嫌い	11	5	16			
Q. 7	好き	69	12	81	0. 058	0. 81	
	嫌い	14	2	16			
Q. 8	好き	58	23	81	0. 053	0. 818	
	嫌い	11	5	16			

 * : $p < 0. 05$

質問と比べ肯定的な意見がやや少ないことから、技術的な面の手立ての強化も必要であると言える。また、伝統芸能の「好き」、「嫌い」と、発表を見てもらうことの嬉しさ、および進んで取り組める積極性の間には関連があり、伝統芸能が好きであることが、発表や取り組みに影響を与えていると推察できる。

2) 伝統芸能と体育におけるダンスのかかわり

質問紙では、Q. 8～Q.10を自由記述とし、特にQ. 8において伝統芸能とダンスのかかわりについて、伝統芸能がダンスに生かされていると思うか否かを割合で示した（図8・図9）。伝統芸能で学んだことが体育のダンスの時間に生かされていると思う児童は68名（70%）であり、「その他」を除いて最も意見の多いカテゴリーが「体の動かし方」（35%）であった。次い

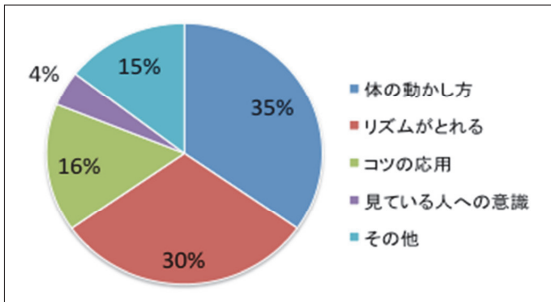


図8. 伝統芸能がダンスに生かされていると思う理由

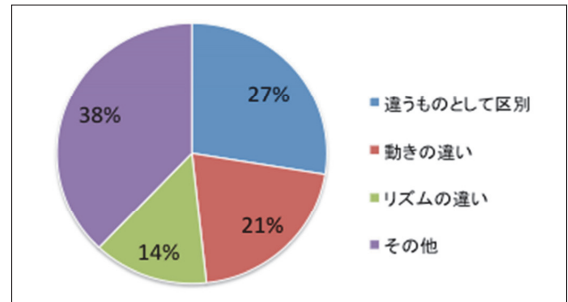


図9. 伝統芸能がダンスに生かされていない理由

表3. 伝統芸能がダンスに生かされていると思う理由

カテゴリー名	記述内容	類似回答数
体の動かし方	ジャンプ力が生かされると思ったから。	5
	おどるときにはねたり、まわったりなどの動きがスムーズにできるから。	3
	どちらも踊ったり見せたりするものだし、伝統芸能もダンスも体を動かしているし、関係があると思うからです。	3
	指をのばしたり、こしをおろしたりしているので、ダンスでも同じような動きがあるから生かされていると思います。	2
	伝統芸能でははげしく動く動きが多いのでそのはげしく動く動きやゆったりした動きが体育の授業のダンスの時間で生かされていると思います。	2
	ダンスも体を大きく動かすから。	
	動作をはっきりさせることに生かされる。	
	ジャンプやいどうの時にやりやすい。	
	高くとべるようになって思うし、こまかい動きができると思うから。	
	少しにているふりつけがある時があるからいろんな踊りに生かされていると思います。	
	横に動く動きが多いから。	
	動きを大きく見せるように、ダンスもひとつひとつの動作を大きくできるようになったから。	
	伝統芸能で足の上げ方が体育のダンスに生かされていると思ったから。	
	ふだんやらない動きをすることが多いし、体育でもたまにダンスをしたりするのでより楽しくなるしおどることに集中できるからです。	
リズムがとれる	伝統芸能で踊りをやっているというリズム感がついてダンスの時に音楽に合わせて踊ることができると思うから。	19
	おはやしで笛をやっているので、音のリズムが分かるから。	
	伝統芸能でリズムやタイミングなどを教わっていて、ダンスでもリズムやタイミングが必要だから。	
コツの応用	体育の時間で難しいことがあったときに、思いだしてできることがあるから。	3
	特徴やコツのつかみ方が分かって生かされると思ったから。	2
	上手にやっているところが生かされている。	2
	工夫の仕方が分かるから。	
	伝統芸能とダンスが似ているところがあるかもしれないから。	
	動きの工夫の仕方などがダンスの時間に生かされていると思ったから。	
見ている人への意識	ダンスの時間が見ている人を楽しませたいから踊りの時も見ている人を気にするようになった。	
	いろんな人に見てもらって、たくさんの拍手をもらおうと自分がせいいっぱいやりとげたと友達や家族に言えるからです。	
	どちらもえがおでおどるからです。	

で「リズムがとれる」(30%)、「コツの応用」(16%)、「見ている人への意識」(4%)と分類した。一方、生かされると思わない児童は29名(30%)であり、「その他」を除いて最も意見の多いカテゴリーが「違うものとして区別」(27%)であった。次いで「動きの違い」(21%)、「リズムの違い」(14%)と分類した(図7, 図9)。

伝統芸能がダンスに生かされていると思う理由における「体の動かし方」ではジャンプや跳ねる動作に関する記述が多く、駒踊りやよさこいソーランなどの動きが影響していると考えられる。また、振り付けに関わらず、「大きく動く」といった踊りにおいて基本的な意識の涵養ができていえる。さらに、リズムに関する記述も多く、これには太鼓やお囃子の練習などリズムに合わせて体を動かす経験を積むことで、リズム感を養っていることがうかがえる。また、「コツの応用」の記述から動きの特徴を捉えていることや、似ているところを捉えて伝統芸能からダンスへ生かせているといえる。

伝統芸能がダンスに生かされていると思わない理由では、伝統芸能とダンスは違うものと認識している児童がいることが分かった。伝統芸能とダンスは動きやリズムが異なり、それぞれの特徴があることは間違いないが、音楽に合わせて体を動かすという点では少なからず応用できるのではないだろうかと考えられる。

表4. 伝統芸能がダンスに生かされていると思わない理由

カテゴリー名	記述内容	類似回答数
違うものとして区別	もしかしたら同じ動きがあるかもしれないけど、伝統芸能と体育のダンスは少し違うと思うから。	5
	あまり伝統芸能をほかのことにつかいたくない。伝統芸能と体育はあまりくっつけたくないと思います。	
	伝統芸能でやったことをダンスに生かそうと意識していなかったから。	
	伝統芸能と踊りは区別しているから。	
動きの違い	腕の動きや足の動きは、ダンスと伝統芸能では違うと思うから。	2
	伝統芸能ははねることが多いけど、体育のダンスはあまりはねることがないから。	
	伝統芸能はダンスとはちがいで、笑顔でやるものではなく、キリッとした顔でやるものだと思うからです。(表情の違い、動きの違い)	
	踊っているジャンル(踊っているもの)が違うから。	
	体育のダンスではあまり激しく踊らないから。	
リズムの違い	伝統芸能とダンスの曲のリズムがちがうから。	4

5. 結 論

階上町では、平成9・10年度の伝統芸能文化教育推進事業により、各小学校で伝統芸能の取り組みが行われるようになった。4校は1年生から6年生まで全校児童が参加し、伝統芸能の活動は当たり前のことという環境で過ごしている。そこで児童が伝統芸能に対してどのような意識を持つのか、また、体育におけるダンスと伝統芸能は関連を持つのか調査した。

児童は伝統芸能の活動を好み、活動をする上での練習や発表などに積極的に臨もうとする意識が見られた。特に、活動を好む児童ほど発表することに喜びを感じ、練習や発表に主体的に取り組んでいることが示唆された。

体育の授業におけるダンスに対しても81%の児童が「好き」であり、踊ることへの抵抗がほと

んど見られなかった。伝統芸能で学んだことがダンスに生かされているという児童は70%であった。体の動かし方やリズムのとり方、また同じ身体表現としてコツが応用できることや、観客への意識の点で、伝統芸能とダンスのかかわりを意識していることが明らかとなった。一方、伝統芸能とダンスのかかわりを意識していない児童は30%あり、動きやリズムが異なるため、伝統芸能とダンスは別のものであるという意見が見られた。

階上町立小学校の6校中5校は、伝統芸能の取り組みを総合的な学習の時間で行っている。現行の学習指導要領における総合的な学習の時間の目標は、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する（一部抜粋）」³⁾ ことである。また、平成22年に文部科学省が発行した総合的な学習の時間に関する指導資料では、「総合的な学習の時間での学習活動やその成果が、各教科等の学習活動への意欲を高めたり学習を促進したりする。総合的な学習の時間と各教科等との関連を意識した学習活動を工夫することが大切である」⁴⁾ と、各教科等との関連が示されている。総合的な学習の時間で行う伝統芸能と、体育で行うダンスとの関連をより強く意識することで、教科横断的な学習となり、双方においてより深い学びになると考えられる。そのために伝統芸能で培った体の動かし方やリズムのとり方をダンスの授業に応用させるような言葉かけや、学習内容のより一層の工夫が必要である。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、階上町教育委員会をはじめ、調査のご協力を頂いた階上町立小学校の教職員の皆様、児童の皆様に深く御礼申し上げます。なお、本稿は、「八戸学院大学特別研究費」による研究成果である。

注1 ここで表記する「ダンス」とは小学校の体育科における表現運動領域のことを指す。アンケート調査では児童への分かりやすさのため「ダンス」と表記し、本文中でも「ダンス」と示している。

引用・参考文献

- 1) 嶋崎綾乃・根城隆幸（2017） 学校教育における階上町の地域伝統芸能と表現運動のかかわりに関する研究. 産業文化研究26号. pp.97-108.
- 2) 文部科学省（2008） 小学校学習指導要領解説体育編. 東洋館出版社.
- 3) 文部科学省（2008） 小学校学習指導要領, 第5章総合的な学習の時間. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm.（閲覧日2017年2月10日）
- 4) 文部科学省（2010） 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）. p.18.